

第3話 GS映画の時代

■アメリカ文化に浸った世代

橋幸夫、舟木一夫、西郷輝彦の「歌謡御三家」が代表する青春歌謡ブームの次に一世を風靡したのがグループサウンズ（GS）だった。

戦後の日本には、戦中には厳禁だったアメリカ文化が急速かつ莫大に流入してくる。50年代の映画全盛期にはアメリカ映画が多数の観客を集めた。また、それまで日本放送協会（NHK）しかなかったラジオ放送に、51年から民間ラジオ局が続々開局して多数の番組が生まれ、第1章で述べたように53年にはテレビ放送が始まる中、日本人の日常に、アメリカをはじめとする西洋の文化は欠かせないものになってくる。

特に戦後生まれの若者は、ものごころついたときからアメリカ文化の洗礼を受けている。50年代末からテレビが各家庭に普及してくると、西部劇やアクション活劇だけでなく「名犬ラッシー」（日本放映 57～66）、「アイ・ラブ・ルーシー」（57～62）、「ルーシー・ショー」（63～66）、「パパは何でも知っている」（58～64）、「うちのママは世界一」（59～63）、「奥様は魔女」（64～72）など当時のアメリカ家庭を舞台にするホームドラマも長期間にわたり数多く放映された。

そこにあるのは、カラーテレビ、電気冷蔵庫、大きな車があり洋式住宅に住んで豊富な食べ物やファッションを楽しむ夢のような暮らしだった。われわれ1950年代生まれの子どもたちは、幼い頃からそうした情景をテレビの中で目撃していた。それは、自分たちの周囲にあった東京五輪前のまだまだ貧しい日本社会とは大きく懸け離れている。自宅の冷蔵庫にアイスクリームの大きな容器があって自由に食べられるなんて！

アメリカは豊かさの象徴だった。「将来何になりたい？」と聞かれた子どもが「アメリカ人！」と答えたというのは、この時代の話である。61年に44歳の若さで就任したジョン・F・ケネディ大統領は、われわれ日本の子どもたちにとってもヒーローだった。小学生向け雑誌には彼の伝記が掲載され、第二次世界大戦のソロモン諸島戦域で艇長をしていた魚雷艇が沈没し九死に一生を得たエピソードなどにワクワクさせられたものだ。

63年にテキサス州ダラスで暗殺されたときは、64年に退陣したばかりの池田勇人前首相が亡くなったときよりも大きな衝撃を受けたと思う。美しいジャクリーン夫人、長女キャロライン、長男のジョン・F・ケネディ Jr.の家族は、60年に浩宮（現・皇太子）が誕生した皇太子（現・天皇）一家と同じくらい日本の子どもたちに広く知られる存在だった。現在のキャロライン・ケネディ駐日大使の気持は、幼少期の彼女に憧れた者の多いわれわれの年代に、甘酸っぱい記憶を蘇らせているに違いない。

そんなふうにアメリカ文化に浸った世代は、当然、音楽に関する嗜好面でもその影響を受ける。いや、文学や映画と違い自然に耳に入ってくるだけ影響は大きかったろう。第1章で触れた歌番組「ザ・ヒットパレード」や「シャボン玉ホリデー」では、「ダイアナ」「シェリー」「ヘイ・ポーラ」「恋の片道切符」「可愛いベイビー」「悲しき16才」などアメリカン・ポップスの日本語カバー曲が流れ、小学生たちまで口ずさんでいた。

■新・三種の神器

一方、音楽文化を支えるレコードも、戦中戦後の生産低迷から脱し、61年には戦前のピークである36年の年間約2960万枚を上回る3280万枚に回復していた。そこから、1億枚を突破する67年まではわずか6年間と、レコード産業全体が勢いよく成長していた。59年には第1回日本レコード大賞が設けられ、紅白歌合戦と並びその年の大衆音楽のヒット曲を決定づける存在となっている。

60年代半ば東京五輪の頃になると経済成長の恩恵が広く行き渡り、小学生でもお小遣いを貯めれば気に入った曲のドーナツ盤（直径17cm、1分45回転のシングルレコードの形状がドーナツを思わせた）を購入することも可能になっていた。買えないときは街角や飲食店に設置されたジュークボックスに十円玉を入れて演奏を楽しむこともできた。音楽を放送で聴くだけでなく、個人的好みで選択できる時代の到来である。

58年に発売されたステレオ録音レコードとステレオオーディオセットは、テレビの普及に続く大型家電商品として購買ブームを呼び、家具としてのステレオが各家庭に備えられるようになっていく。65年にテレビ95.0%、電気洗濯機78.1%、電気冷蔵庫68.7%の普及率に至った家電「三種の神器」に続く「新・三種の神器」がカラーテレビ、ステレオ、クーラーなのだった。さらに60年代後半には小型のステレオが自室用として若者にも購入可能になっていく。

前章で紹介した『青春デンデケデケデケ』のように、65年頃には田舎の高校生でもエレキギターを手に入れることができるようになっていた。そしてビートルズ旋風。戦後生まれで西洋文化、西洋音楽に慣れ親しんできた世代が青年になり、自分たちのセンスに合った音楽を模索するとしたら、それまでにはない新しいものに行き着くのは当然のことかもしれない。

『若大将』加山雄三のように戦前生まれ世代の中からもランチャーズを結成するなどバンド音楽の試みがあったことは、『エレキの若大将』が65年に作られたことでもわかる。既に寺内タケシ（1939～）は62年に「ブルージーンズ」を結成し内田裕也（1939～）、加瀬邦彦（1941～）らと本格的エレキバンドを志向した。この3人は、『若大将』シリーズで加山の音楽面を支えてもいる。

■GSブーム最盛期の三大グループ

66年のビートルズ日本公演は、多くのグループサウンズが生まれる契機となった。同年ジャッキー吉川（1938～）率いるブルー・コメッツがデビュー曲「青い瞳」をヒットさせて紅白歌合戦に初出場する。これがGSブームのはしりと言えよう。翌67年の「ブルー・シャトウ」は大ヒットを記録し日本レコード大賞を受賞する。

それに続くように、GSはヒット曲を連発していく。田邊昭知（1938～）のザ・スパイダースは66年の「夕陽が泣いている」、67年「風が泣いている」など。人気ボーカルの堺正章（1946～）、井上順（1947～）は戦後生まれである。

66年のデビュー曲「いつまでもいつまでも」をヒットさせた名優・宇野重吉の長男である寺尾聰がボーカルを務めるザ・サベージは、続く「この手のひらに愛を」もヒットしたことで、GSブーム初期においてブルー・コメッツ、ザ・スパイダースと共に3大人気グループとなった。こちらは世代的には少し下で寺尾たち戦後生まれとそれ以前が相半ばしている。

前記の加瀬邦彦が率いるザ・ワイルドワンズは66年のデビュー曲「思い出の渚」がヒットし、68年の「バラの恋人」などがある。加瀬以外のメンバーは全員戦後生まれ世代である。前章で触れたように、その弟分バンドに67年「真冬の帰り道」でデビューしたザ・ランチャーズがある。

ヴィレッジ・シンガーズは67年のデビュー曲「バラ色の雲」でブレイクし、68年の「亜麻色の髪の乙女」が大ヒットした。戦後生まれとそれ以前がほぼ半々のこのグループは、ブルー・コメッツやザ・サベージのように短髪にジャケット姿のノーマルなファッションで通した。

67年のデビュー曲「君に会いたい」が大ヒットしたザ・ジャガーズは当時流行のミリタリー・ルックのファッションでも売った。ボーカルの岡本信だけが戦後生まれ。

67年「いとしのジザベル」でデビューしたザ・ゴールデン・カップスはリーダーのダイヴ平尾以外は戦後生まれで、68年「長い髪の少女」が大ヒットする。

全員戦後生まれのザ・カーナビーツは、67年のデビュー曲「好きさ好きさ好きさ」が大ヒットし、絶叫調の歌唱がライブのファンを熱狂させた。

67年「僕のマリー」でデビューしたこれも全員戦後生まれのザ・タイガースは、68年にかけて「シーサイド・バウンド」「君だけに愛を」「花の首飾り」「シー・シー・シー」とヒット曲を連発し、人気絶頂を極める。

ショーケン萩原健一がボーカルのザ・テンプターズも全員戦後生まれ世代。67年「忘れ得ぬ君」でデビューし、68年に「神様お願い」「エメラルドの伝説」が大ヒットする。

67年「朝まで待てない」でデビューしたザ・モップスも全員戦後生まれで、アメリカで流行していたサイケデリック・サウンドを取り入れ他のGSのように揃いのコスチュームでなく各自まちまちのヒッピー風ファッションが特徴だった。

同じく全員戦後生まれのジ・オックスは68年「ガール・フレンド」でデビュー、「スワ

ンの涙」をヒットさせた。ボーカル赤松愛がライブのステージで昂揚のあまり失神し、それに気分を同調させた女性観客が客席で失神するという「失神バンド」騒ぎでマスコミにクローズアップされ、学校がライブへの入場を厳禁したり地婦連が抗議したりする社会問題となった。ザ・タイガース、ザ・テンプターズ、ジ・オックスはGSブーム最盛期の人気を牽引した3大グループである。

■不良の象徴

このように、66年から68年までの間、GSは隆盛を極めた。レコードデビューを果たしたバンドだけでも100を超えている。それを支えたのは当時十代後半の、主に高校生たちである。おおむね48年生まれから52年生まれくらいの世代である。68年に高校へ進んだわたしもその中の一人だから実感としてよくわかるが、前述のように子どもの頃からアメリカ文化にどっぷり浸り、洋楽に親しんできたわれわれは、旧来の演歌や歌謡曲には満足できないものを感じていた。

大人たちがもてはやす美空ひばり、島倉千代子、三波春夫、春日八郎、三橋三智也といった大歌手の歌に魅力を感じられず、エレキのリズムに乗ったメロディーや素直に若者の気持を綴った歌詞に惹かれていったのである。また、GSのスターたちの長髪やステージ衣装は、当時の高校生には学校や親から許されていない類のものだった。女子高校生だけでなく男子にとっても、そのスタイルは憧れの対象となった。

『パッチギ!』(05井筒和幸)は68年の京都の高校生活を扱った映画だが、テーマとなる「イムジン河」をはじめ「悲しくてやりきれない」「あの素晴らしい愛をもう一度」といったザ・フォーク・クルセダーズの曲だけでなくオックスの「ダンシングセブティーン」「スワンの涙」が使われ、ボーカルの野口ヒデトを加瀬亮、失神する赤松愛を浅利陽介が演じ、映画冒頭でライブの様子が再現されている。わたしと同年齢で68年に高校1年生だった井筒のGSに対する思いの丈が感じられるような場面だった。

また、れっきとした国産でありながら明らかに外国を舞台にした歌詞の曲が出たのもGSの特徴である。森と泉に囲まれたヨーロッパの古城を思わせる「ブルー・シャトウ」をはじめ、「亜麻色の髪の乙女」や「愛しのジザベル」への思いが歌われたり「エメラルドの伝説」が語られたりした。それは、アメリカン・ポップスの訳詞でダイアナやシェリーやポーラが出てくるのとは違い、日本風に消化した新しいニュアンスだった。

しかしそれは同時に、大人側から胡散臭く思われる理由ともなる。長髪やエレキギターは不良の象徴扱いされ、若者の非行につながると断じられて強い風当たりにもさらされる。高校生がGSのライブを観に行っただけで停学とかの処分を食らうのは珍しくなかった。そんな厳重処分を世間は当然のこととして受け止め、一般マスコミにも新しい音楽シーンとして擁護する論調は見られなかった。

67年のザ・タイガースの野外ライブで、昂奮したファンの転倒事故が発生、重軽傷者を出したことは、GSへの風当たりをさらに強めることになる。NHKは、タイガースなど長髪系GSを出演させなくなった。失神騒動もあり、68年になるとGSにはライブ会場を提供しないという劇場や自治体が多くなっていく。

ブルー・コメッツのように短髪でスーツの大人系GSは許容され紅白歌合戦出場やレコード大賞受賞を果たせたものの、戦後世代の長髪系は社会の敵扱いさえされた。それもあり、音楽業界の中でも渡辺プロやホリプロといった大手芸能プロダクションが所属GSを音楽的にも行動的にも強く管理したために、当のGSメンバーたちが反発して脱退騒ぎを起こすようになり、69年になるとブームは急速に下火になっていく。

それは社会的な場面でも、音楽業界的な場面でも、戦後生まれの若者たちが大人に敗北した過程だと言える。その3年後、全共闘運動が社会的にも政治的にも左翼運動的にも大人に敗北し自滅していくのと、ある意味通じるものがあるかもしれない。

ともあれ、66年から68年のGSブームは戦後生まれ世代の最初の音楽的挑戦だったし、若者のみによって支えられた音楽ムーブメントでもあった。その後もその世代の懐かしい青春の思い出として、GSの音楽は根強く支持され続ける。いくつかのグループが再結成されたり、懐メロとして登場する場を設けられたりした。そのうちのひとつ、ザ・ゴールデン・カップス再結成は、ドキュメンタリー映画『ザ・ゴールデン・カップスワンモアタイム』（04 サン・マー・メン）に記録されている。

2013年のザ・タイガース再結成ツアーは、東京ドームなど全国7都市の会場で満員の観客を集め全盛期には出演不能だったNHKなど一般マスコミでも大きく取り上げられた。還暦を過ぎたザ・タイガースが全盛期のメンバーで再結成され、同じく還暦を過ぎた当時のファンが集う。GSは、ひとつの時代の記憶なのである。

■スパイダース——GS映画の先陣を切る

話をGSブーム当時に戻そう。熱狂的ファンを大量に集めたこのブームを、経営面で青息吐息の日本映画界が見逃すはずがない。彼らの人気に乗じて、多くの映画が企画された。ブーム全盛期の67年、68年に本のGS主演作が作られている。

最初に映画に登場したのは、ザ・スパイダースだった。GS時代の前、61年にリーダーの田邊昭知が初めてバンドを結成した頃から、守屋浩のヒット歌謡曲「有難や節」を映画化した日活『有難や節あゝ有難や有難や』（61 西河克巳）に守屋のバックバンド役で出演、その後も日活で舟木一夫の『仲間たち』（64 柳瀬観）、『高原のお嬢さん』（65 柳瀬観）、『君は恋人』（67 斎藤武市）、青春歌謡映画『涙くんさよなら』（66 西村昭五郎）、『青春ア・ゴーゴー』（66 森永健次郎）に彩り役として出演してきた。

田邊がバンド結成前から東宝『檻の中の野郎たち』（59 川崎徹広）『別離の歌』（60 瑞穂春海）などに端役で出ていたことや、日系アメリカ二世のジャズシンガーであるティープ

釜菫（かまやつ）を父に持つかまやつひろし、人気コメディアン堺駿二の次男であり子役で映画デビューしている堺正章と、芸能界慣れしているメンバーがいたことも、スパイダースの映画出演を後押しした。

個人としても、かまやつは日活『東京騎士隊』（61 鈴木清順）『波止場の賭博師』（63 山崎徳次郎）『学園広場』（63 山崎徳次郎）、堺は大映『高校三年生』（63 井上芳夫）『続・高校三年生』（64 弓削太郎）『幸せなら手を叩こう』（64 湯浅憲明）、東映『君たちがいて僕がいた』（64 鷹森立一）『夢のハワイで盆踊り』（64 鷹森立一）、日活『花咲く乙女たち』（65 柳瀬観）『東京は恋する』（65 柳瀬観）、東宝『喜劇 駅前百年』（67 豊田四郎）に単独出演している。また、田邊は松竹の愛欲サスペンス『濡れた逢びき』（67 前田陽一）で加賀まりこの相手役で主演している。

日活『夕陽が泣いている』（67 森永健次郎）は、いわずと知れたスパイダースの大ヒット曲の映画化だが、歌謡御三家ヒット曲の初期における映画化と同じく、スパイダース自身は実際と同じくバンドとしての出演で、主演は山内賢、和田浩治、和泉雅子のトリオが勤めていた。

G Sとしての本格主演作は、日活『ザ・スパイダースのゴー・ゴー・向こう見ず作戦』（67 斎藤武市）である。倉本聰と才賀明の共同脚本は、スパイダースの7人を大人の理解を超えた突き抜けた発想をする若者集団に設定した。素人歌謡コンクールに優勝した娘（松原智恵子）がなかなか煮え切らない恋人（山内賢）に向けテレビで発言したメッセージ「あらゆる障害を乗り越え自分のところに直進してくる男性を待つ」を真に受けた7人が、横浜から東京の彼女の元へひたすら真っ直ぐ行進を始める。

店舗や住居を通り抜け、交差点に入り込んで交通事故を起こし……という行進は一旦警察に阻止されたが、マスコミの注目を集めたことが追い風になって再び前へ進み続ける。それに慌てた恋人も近所にある娘の家へ直進しようとするが皮肉にも距離的に近いこちらには厳しい障害が立ちはだかる。両者のナンセンスな到達競争がみどころだ。

まさに「向こう見ず」な行動をする若者集団という役回りは、実社会の中でG Sが持っていたイメージと重なるものがあつた。戦争や戦後の混乱を体験した大人たちからすれば、長髪でエレキ音楽を掻き鳴らす彼らは、理解不能の集団に見えたらう。それは、学生運動、ヒッピー、フーテン族などの新しい若者風俗に対する戸惑いとも重なっていた。当時32歳の倉本聰、35歳の才賀明という新進脚本家コンビならではの目のつけどころである。

続く『ザ・スパイダースの大進撃』（68 中平康）となると、スパイダースの人気に寄りかかる作り方が明確になる。前作が軽い若者向け2本立てでお盆興行後の8月末に公開されたのに対し、この二作目は吉永小百合ほか日活青春スター総出演の『花の恋人たち』（68 斎藤武市）との組み合わせで68年お正月興行を飾った。

内容も、山内賢など日活の青春スターが織りなす主筋にからむのではなく「スパイダー

ス」を演じる本人たちの巻き起こす騒動が中心に据えられる。ツアー中に犯罪に巻き込まれるという話運びも彼らが主役で、日活のスターはわずかに和泉雅子が助演するに過ぎない。また、これ以降のスパイダース映画は、かまやつが映画音楽担当に名を連ねている。

『ザ・スパイダースの大騒動』(68 森永健次郎)も「スパイダース」が主人公だ。演奏会場へ移動中の自動車事故をきっかけにした恋の鞘当てがテーマで、堺正章と井上順のコミカルな掛け合いを見せる。『ザ・スパイダースのバリ島珍道中』(68 西河克巳)は場を香港、バリ島と海外に移し、国際密輸団がらみの文字通り「珍道中」を繰り広げる。

そして東宝『につぼん親不孝時代』(68 山本邦彦)は、GSを支持した戦後生まれ世代とその親に当たる世代の対立を「親不孝時代」と規定して描く。親世代に当たる当時43歳の松山善三が原作を担当し、これがデビュー作になる山本監督が脚本を書いている。「日本」を「につぼん」と表記する題名からして『につぼん昆虫記』(63 今村昌平)『につぼんばらだいたす』(64 前田陽一)といった60年代社会派ドラマを連想させた。

スパイダースは二手に分かれ、堺、井上らはバンドを夢見る若者として親世代と対立し、田邊とかまやつは音楽好きのフーテンという役柄で話に加わってくる。親世代が経済開発を目論む者と開発反対派との争いを展開するのに対し、若者たちはそれと関係なく自由な生き方を求める。凶らずも巻き込まれた密輸騒動を星由里子の潜入婦人警官と共に解決した7人は、バンド活動をする自由な旅へと出発する。

戦前の教育を受けた親世代と、戦後民主主義教育で育ちアメリカ経由の西洋文化に親しんできた戦後生まれ世代とは、価値観を共有するのがなかなか難しかった。特に男の子と父親の対立は顕著なものがあつた。なにしろ、結婚するには親の承諾が欠かせないという常識が横行した時代である。そのような結婚問題、若大将の家業を継ぐ継がないの騒ぎのような就職問題、さらには進学問題まで対立点には事欠かない。

この映画のスパイダースは、そうした息子世代の代弁者だった。ちなみに若者側の中心となる堺正章の父・堺駿二は舞台のみならず戦後は映画でも喜劇役者として大活躍し、夥しい数の映画に出演している。『大進撃』『大騒動』でも晩年得意にしたお婆さん役でゲスト出演しているが、『親不孝時代』では堺でなく井上の父親の住職役で本格的に登場している。この映画撮影後、舞台上で倒れ急逝してこれが遺作となった。

■ ヴィレッジ・シンガーズ——斉藤耕一による歌謡映画の世界

スパイダースの弟分格として『ゴー・ゴー・向こう見ず作戦』『大進撃』に出演したザ・ヴィレッジ・シンガーズは、松竹で主演作を撮る。「バラ色の雲」「亜麻色の髪の乙女」とヒットを連発した彼らは、スパイダースの助けを得て松竹『思い出の指輪』(68 斉藤耕一)で初主演した。

大学4年生5人組がヴィレッジ・シンガーズとしてデビューするまでを描くのだが、スパイダースで活躍する堺が1年先輩の卒業生という設定になっている。この大学の学生に

よる伝統行事は卒業時に女子学生が学内一の理想の男子を選び「ナルシスの指輪」を記念に贈るというもので、前年は塚が選ばれ、今年は5人組が候補になっていた。

女子学生たちの騒ぎをよそに5人は、荒れていた自分たちを立ち直らせてくれ、今は病床にある高校時代の恩師を助けるために奔走する…。GS、指輪、学園という軽い三題話のような他愛ない物語だ。しかし、映画スチールカメラマンから前年『囁きのジョー』で監督に挑み斬新な映像感覚が評判を呼んだ斉藤耕一の作る映像と恩師の妹を演じた新人女優・尾崎奈々の清新な魅力とが、ヴィレッジ・シンガーズの歌声と絶妙にマッチして心地良いのである。

そのためか、次の『虹の中のレモン』（68 斉藤耕一）は実質的に尾崎奈々の主演作となっている。彼女が友人の縁で主不在の鎌倉の屋敷を子どもたちの施設にするため奮闘し、偶然知り合ったヴィレッジ・シンガーズに助力を求める。話の方は、屋敷の主人と息子の不和を解消させ彼女と息子が結ばれるハッピーエンドになるのだが、主人＝加東大介、息子＝竹脇無我、別れた母＝沢村貞子という助演陣が引き締める。

三作目『落葉とくちづけ』（68 斉藤耕一）も尾崎主演作と言っているが、ここではヴィレッジ・シンガーズは自身と自身にそっくりな素人バンドとの二役で活躍している。5人ともヒロインに片想い、彼女と正体不明の漫画家＝藤岡弘との恋を邪魔しようと画策する。記憶喪失、漫画の作中と現実の混同といった要素がからみ不条理劇のような部分もあってなかなか刺激的な恋愛ドラマだった。町中を白ペンキで塗り尽くしてしまおうとする場面など、幻想めいた趣きもある。

どの作品も、さまざまなカメラ技法を駆使した斉藤の映像と尾崎奈々のキャラクターとヴィレッジ・シンガーズの音楽とが美しいハーモニーを生んでいた。

この三部作の間に挟まって斉藤耕一・尾崎奈々コンビの『小さなスナック』（68 斉藤耕一）という作品がある。一応GSにカウントされているもののフォーク調、ムード歌謡調の曲で他とは異質な感じだったパープル・シャドウズのデビュー曲で唯一のヒット曲を映画化し、彼らも出演しているしヴィレッジ・シンガーズもゲスト出演しているのだが、GS映画というよりは斉藤が傾倒していたジャン・リュック・ゴダール監督ばりの実験映画的色彩が強い。

なお、『小さなスナック』『落葉とくちづけ』の後、斉藤は日活で伊東ゆかりの『愛するあした』69、松竹で西郷輝彦の『海はふりむかない』69、歌謡御三家競演の『青春の条件 東京ーパリ』70、森進一の『波止場女のブルース』70、1作おいて辺見マリの『めまい』71、森進一の『旅路 おふくろさんより』と、歌謡映画を連作した。この時期の斉藤耕一は、映像とGSソングや歌謡曲との融合に最も意を払った映画作家だと言っている。

■タイガース——田波脚本による非日常性の誇張

GSの中で最も高い人気を誇ったザ・タイガースも、当然のことながら映画に登場して

くる。東宝『ドリフターズですよ！ 前進前進また前進』（67 和田嘉訓）に作中のGS役として顔を見せた後、東宝で主演作『ザ・タイガース 世界はボクらを待っている』（68 和田嘉訓）が作られる。これがまた奇想天外。『若大将』シリーズの田波靖男による脚本は、なんと宇宙規模の恋愛ストーリーだった。

ヒット曲「銀河のロマンス」の歌詞の中で繰り返される「シルビー・マイ・ラブ」という女性への呼び掛け通り、ヒロインの名はシルビー。アンドロメダ星のお姫様（！）なのである。宇宙を散策するうち地球でタイガースのライブに紛れ込み、ファンの人波にもまれ失神してしまう…と、失神騒動まで材料にした。この王女とジュリー沢田研二の間のつかの間の淡い恋が描かれる。GSの持つ非日常性を極端に誇張した怪作だ。

シルビーを演じるのはタイガースの相手役に抜擢された新人・久美かおり。同時に歌手としてもデビューした彼女は、タイガース主演作のみに出演して引退する。『ザ・タイガース 華やかなる招待』（68 山本邦彦）では田舎から東京へ出てきたミュージシャンを目指す高校生5人組を助けデビューさせるための奔走する娘として、健気なところを見せた。ここでは田波脚本もおとなしく、事故に遭った彼女をメンバー皆が助けるというありがちな話で終えている。

ロンドンロケの『ザ・タイガース ハイ！ロンドン』（69 岩内克己）の田波脚本は、「タイガース」を演じる彼らの超多忙で自由な時間が取れない私的悩みをそのまま楽屋落ち風に物語にする。時間を売る悪魔と魂を担保に契約し、約束の帰還時刻を守るという条件で自由を得て憧れのビートルズゆかりのロンドン旅行を実現する。途中妨害して遅刻させようとの悪魔の企みを阻止したことから、その旅に同行することになる歌手志望の娘に、久美かおりが扮している。タイガースからは加橋かつみが抜け、岸部四郎（のち、シロー）が加入している。

GS映画の多くは、ビートルズの主演映画『ビートルズがやって来る ヤア！ヤア！ヤア！』（64 リチャード・レスター）『HELP！ 四人はアイドル』（65 リチャード・レスター）を大なり小なり意識していたと思われる。すなわち、「ビートルズ」自身を演じるという手法やデビューまでの苦労やスターになってからの忙しさなどその実際の姿を話に反映させること、フィクションだと突拍子もない事件に巻き込まれることなどだろうか。

■テンプターズ——「おかあさん」をモチーフにしたウエットなメロドラマに出演

タイガースの「ジュリー」沢田研二と対抗できるGSの人気者といえば、唯一「ショーケン」萩原健一だったのではないか。彼がボーカルを務めるザ・テンプターズは日活『星影の波止場』（68 西村昭五郎）にザ・モップスとともに顔見せ的に出演した後、主演作『ザ・テンプターズ 涙のあとに微笑みを』（69 内川清一郎）が用意される。ここでも多くのGS映画がそうであるように、テンプターズのメンバーはスターになる前の自分たちらしき存在を演じている。

音楽好きの高校生たちが神様から力を授かった不思議な娘の力でGSデビューするまでの話なのだが、直前のヒット曲「おかあさん」がモチーフにされたのか、母親の再婚をめぐる世話場ばなしが傍筋となり、そこになまじっか新珠三千代、山岡久乃、名古屋章、須賀不二男といったベテラン脇役陣を起用したためにまるで母ものメロドラマのようなウエットさが色濃くなってしまった。それまで十数年の監督キャリアの中に若者映画の経験がほとんどなかった内川監督の起用もミスマッチだったのかもしれない。

ただ、そもそも「おかあさん」は「オー ママ ママ」というリフレインこそGS風でも「母さんが 言った 言葉 / いつまでも いつも いい子で / たった一言 いい子でいてね」という「おっ母さん」「おふくろさん」歌謡の趣が強く、大人との対立というGSの基本路線にはそぐわないものがあつた。ブームが陰りを見せていたことの表れかもしれない。

■スパイダース主演の予定だった怪作——『進め！ジャガーズ 敵前上陸』

ザ・ランチャーズの『リオの若大将』出演については前章で紹介した。このシリーズにはザ・ワイルドワンズも出演している。同じく主演映画以外だと、先述のザ・モップス以外にもザ・カーナビーツがいくつかの作品にバンド役で出るなど、時代若者風俗の象徴として、青春映画以外にもGSは、「ブルー・シャトウ」をGS最大のヒット曲にしたブルー・コメッツも、何本かにバンド出演しただけで主演作の話はなかつた。

ジュリーやショーケンのような大人気スターがいるか、スパイダースのような総合力を持っていないとそこまでは難しかったのだろう。オックスの場合はデビューが遅れ、GSブーム全盛期とズレてしまったことが大きい。

その中で異彩を放つのがザ・ジャガーズの『進め！ジャガーズ 敵前上陸』（68 前田陽一）である。後にユニークな喜劇映画作家として地位を確立する前田と中原弓彦こと小林信彦が脚本を書きミュージカル場面の「作詞」として井上ひさしがクレジットされている。小林信彦にとって唯一の脚本を、後年自著でスパイダースの主演映画として企画されたものが諸事情で変更になったと回想しているのを読むと、なんとなく経緯がわかる。

「ジャガーズ」自身を演じるのも、ライブツアーの途中で密輸団の犯罪に巻き込まれるのも定石通り。ただ、ライブの行き先は八王子サマーランドとか地方の温泉とか場末感がある。映画冒頭、実際のジャガーズコンサートの模様を実写し歌が流れファンが熱狂するのはお決まりの出だしたが、そこにカットバックで砲弾が炸裂する戦場映像が何度も差し挟まれるのは穏やかでない。

果たして、巻き込まれた騒動は硫黄島に持ち越されそこへ「敵前上陸」したボーカルの岡本信は潜伏していた生き残り日本兵と遭遇し、彼の助力で密輸団をやっつける。まだ戦後23年。4年後の72年にはグアム島で横井庄一、6年後の74年にはフィリピンで小野田寛郎が発見され帰還した。決してあり得ない話ではなかつた。ベトナム戦争についての言

及も含め、前田、中原（小林）の軍国主義教育に裏切られた元軍国少年のこだわりが表れている。

とはいえ全体はハチャメチャな喜劇仕立てという怪作だ。いい加減な描写も少なくない。それでも、歌手としても「虹色の湖」でヒットを飛ばしたばかりの中村晃子、直後に公開の前出『思い出の指輪』で青春スターの地位を固める尾崎奈々の2人がフレッシュな魅力を発揮し、低予算のプログラム・ピクチュアながら同年のキネマ旬報読者のベストテンで女性読者の部（当時は男女別の集計だった）で6位に入っている。

1位『爽春』（中村登）、2位『黒部の太陽』（熊井啓）、3位『日本の青春』（小林正樹）、4位『めぐりあい』（恩地日出夫）、5位『不信のとき』（今井正）に続く堂々の評価ぶりである。ジャガーズファンの組織票？ その頃のキネマ旬報は極めてマニアックな映画雑誌であり、それはあり得ない。今日でも一部でカルトムービー的評価を得ているように、ハマってしまう人には応えられないものがあるのだろう。

この映画は、68年3月に『帰って来たヨッパライ』（68大島渚）と2本立てで公開されている。こちらはフォークグループ、ザ・フォーク・クルセダーズの大ヒット曲の映画化で、彼ら自身が主演している。青春映画でもアイドル映画でもなく在日朝鮮人と日本人の関係を問うたガチガチの政治メッセージがこめられており、ジャガーズのファンやヒット曲の知名度に釣られてこの2本立てに入った観客はさぞ驚いたことだろう。

■映画界・音楽界に多くの人材を輩出

さて、GS主演の映画は、67年に1本、68年に9本、69年に2本と、67年8月の『ゴーゴー向こう見ず作戦』から69年7月の『ハイ！ロンドン』までわずか2年間に集中して作られている。GSブーム自体が、それより少し早めに盛り上がり、少し早めに消えて、ちょうど同じくらいの期間だった。期間の短さだけをあげつらえば、一過性の徒花と言えなくもない。

だがそれは、音楽産業にとっては痛手だったかもしれないが、当のGSメンバーにとっては必ずしもそうではなかったのではないか。自分のやりたい音楽とプロダクションやレコード会社から求められる音楽との乖離に悩んだ者も少なくなかったろう。コスチュームやマスコミへの売り出し方への不満もあったろう。タイガースの加橋かつみをはじめ、多数のバンド脱退者が出たのはその証拠だった。

GSブームが終わったからといって、彼らが音楽を棄てたわけではない。沢田研二らソロシンガーとして活躍した者、GSとは違う新しいバンド活動で成功した者、作曲家、編曲者、演奏家、音楽プロデューサー、音楽事務所経営など、上の世代とは違う新しい感覚で音楽業界を刷新した元GSメンバーはいくらでも挙げられる。むしろ、その後の音楽の方向性をリードしていったのではないだろうか。

同様に、映画出演も彼らにとってあまりうれしいことではなかったろう。極めて忙しい

スケジュールを縫って撮影現場に入り、勝手の違う業界のペースに引きずり回されるのだ。やりたくない役も、着けたくない衣装もあったろうし、何より、自分たちの曲をこんな場所でこんな形で披露することへの抵抗感は大きかったろう。映画など二度とごめんだと思ったとしても仕方ない。

しかし、である。実に多くの元GSメンバーが、その後も映画界で活躍している。『太陽を盗んだ男』(79 長谷川和彦)、『リボルバー』(88 藤田敏八)、『夢二』(91 鈴木清順)、『大阪物語』(99 市川準)などの沢田研二(タイガース)、『約束』(72 斉藤耕一)、『青春の蹉跎』(74 神代辰巳)、『恋文』(85 神代辰巳)、『居酒屋ゆうれい』(94 渡邊孝好)などの萩原健一(テンプターズ)は、映画界でもスターの座に君臨した。数々の作品に出演し名脇役として広く知られる岸部一徳(タイガース時代は岸部おさみ)は、『死の棘』(90 小栗康平)で主演男優賞を総ナメにしている。

寺尾聰(サベージ)は、黒澤明作品に多数出演し、『半落ち』(03 佐々部清)、『博士の愛した数式』(06 小泉堯史)などに主演している。堺正章(スパイダース)は『街の灯』(74 森崎東)に主演したほか『夕風の街 桜の国』(07 佐々部清)など助演でも活躍している。井上順(スパイダース)も、『ムツゴロウの結婚記』(74 広瀬襄)、『JAZZ 爺 MEN』(11 宮武由衣)などに主演し最近も脇役でいいところを見せている。スパイダースでは田邊昭知、かまやつひろしも俳優として映画に出演している。

そのほかにも、岸部シロー(タイガース)、大口広司(テンプターズ)、林ゆたか(ヴィレッジ・シンガーズ)、夏夕介(オックス時代は田浦幸)、鈴木ヒロミツ(モップス)、デイヴ平尾(ゴールデン・カップス)、大矢茂(ランチャーズ)などが映画俳優の仕事をしたことがある。

GSブームは短命だったが、そこから多くの人材や音楽文化、映画文化が生まれてきたとは言えないだろうか。